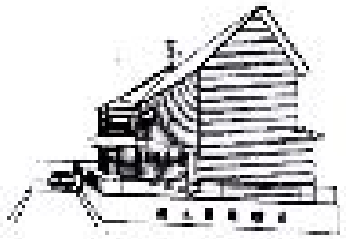
＜今朝の聖書から＞先週の“するとイエスは、自分のことをだれにも言ってはいけないと、彼らを戒められた（マルコ8：30）”という箇所について、見てみることが残っています。当時のイスラエルでもメシア（キリスト）という言葉は歴然と受け取られていました。すぐに分かるように、それはもう長い長い間の、預言者の時代からのものでもありました。その姿は栄光に輝く“ダビデ王の時代の王国の再建者”とも、また大祭司の姿とも考えられていました。軍事力をもって王国を再建するにしろ、大祭司の権威が与えられて歴史に登場するかは別にして、主の考えておられた出来事（父なる神から与えられていた贖いの業）とは違うものだったのです。魂の罪からの解放による新しいイスラエルという教会の群れがキリストの業だったのですが、残念ながらペテロも、言い伝えに拘束されて王なる栄光をイエス様に重ね合わせていたようです。イエスはイザヤの預言したように“それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に、物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした（イザヤ53：12）”に代表されるような“苦難の僕”の姿を語られたのです。ですから救世主の姿の誤解を避けるために“人の子（マルコ8：31）”という言葉を使われました。弟子たちに奥義として与えられたこの言葉も、多くの民衆には、受け入れがたいものであったことをイエス様は強調されました。これが“他言無用の戒め”だったようです。今朝の場所も、弟子達だけの経験でした、ペテロ、ヤコブ、ヨハネがその弟子達です。彼らにはそこが神の国（天国）であることがすぐに分かりました。くどくど説明することもなく、イエス様が話している相手が、モーセでありエリヤであることが分かったのです。不安にさいなまれる弟子たちに主は天国の経験をさせて下さったと言えるでしょう。こんなに強いことはありません。経験したことですから。彼らは、初代の教会の時代になって初めて、湖の畔で神に出会い、山上で天国を経験したことを語り、聖書にこのことが記録されるに至ったのでしょう。実は私たちも、神様を信じた時、主と出会い天国を信じ、主の民として永遠に生きますと約束しているのです。私たちが“それどころではない”とばかりに、神様から離れようとする時も、その時こそ、主は天国を見せて下さるのではないでしょうか。

週　報

２０１０年　3月　１４日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト
清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☎054-345-4070　　E-Mail grace@big.jp
振替口座　00890-6-214042